

物笑いの種にならずに

カデットはなにをかかげて選挙にのぞむか？

土曜日（9月15日）の新聞『レーチ』の主張は、カデット党の基本的な政治的原則を正しく叙述したものである。では、この自由主義的＝君主主義的ブルジョアジーの最大の党のこの原則はなにに帰着するか？

それはつぎの三項目に帰着する、（一）「選挙権の拡大」、（二）「参議院の根本的改革」、（三）「内閣が人民代表に責任を負うこと」がそれである。結社（団結）の自由その他すべての自由、民族の同権、農村の分化を「阻止しおくらせること」等々が、これに付けくわえられることは、もちろんである。

読者は、自由主義者のこの「三項目」を、政治問題にも、労働者問題にも、農民問題にも真の答えをあたえている労働者民主主義派の「三項目」とくらべてみるがよい。あらゆる悪弊と困窮の真の源と、こうしたものの真の「集中点」も、打開の方法も、労働者民主主義派の「三項目」によってこのうえなく明らかにしめされている。

カデットのこの自由主義的な政綱——これは形式的にはそうではないが、本質的にはまさにカデットの選挙綱領にほかならないから——は、控え目な立憲的改革の願望にすぎない。この願望はオクチャブリストの願望とほとんどすこしもちがわない。

主要なことはわきにのけられてしまった。自由主義的＝君主主義的ブルジョアジーの党には主要なことについてはなにも言うことがないのだ。……

いや、諸君、諸君が三項目で、あるいは二〇項目で立憲的改革を列举しよう——いずれにしても諸君の政綱は、依然として死んだものなのだ。

物笑いの種にならずに立憲的改革を論じることができるのは、政治的自由の基礎と基柱がすでに存在し、形づくられ、確保され、確固としたものになっている時と場所だけである。

諸君自身、ロシアではまだそうではないことをご存じである、だから諸君のけっこうな願望は、民主主義勢力に打開の道を指ししめさずに、あてにならない希望によって彼らを欺いているのである！

注)………は青山の略

第36巻『カデットはなにをかかげて選挙にのぞむか？』P202～203

1912年9月15日から20日（9月28日から10月3日）のあいだに執筆

コメント

選挙綱領には、あらゆる悪弊と困窮の真の源と、こうしたものの真の「集中点」、その打開の方法がなければならぬ。レーニン、ツアラー専制のもとで、カデット党が立憲的改革の願望によって、民主主義勢力を欺いていることを批判している。